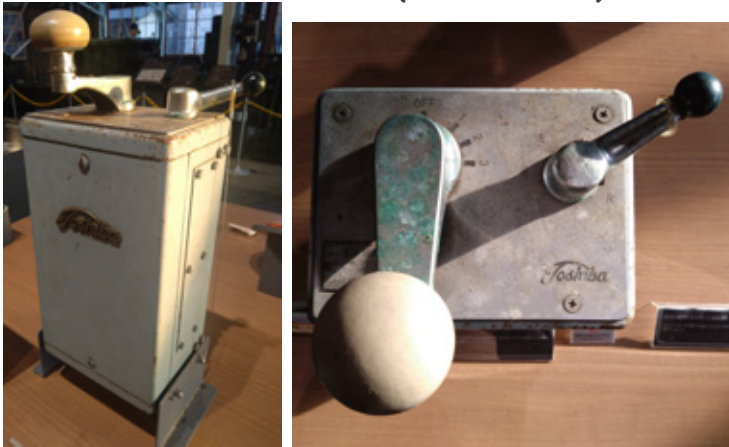


修繕庫の中にある展示物

安全な運行を支えていた車両設備

M182のマスコン(主幹制御器)



車両を加速させるための装置で、運転士が操作するマスターコントローラーです。

左側のハンドルには“OFF”、“1”、“2”、“3”の表示があり、数字が大きくなるほど、車両のスピードが速くなります。そして右側のハンドルには“F”、“R”とあり、Fは前進、Rは後進する時に切り替えます。

このマスコンは、元福島交通のモハ5300形で、後に栗原電鉄でM182として走行した車両のものです。



現役時代のM182

ED20形の尾灯



栗原電鉄時代に活躍した電気機関車、ED20形の尾灯です。列車の最後尾に点灯する赤いライトである尾灯は、テールライト、またはテールランプとも言われます。この車両では、車体の前後左側のみに付けられています。



栗原電鉄の社紋

社紋とは、企業の社章(シンボルマーク)のことです。このマークは栗原電鉄時代に、車両の側面や車掌の制服、帽子などに付けられていたものでした。



ED203の車両側面にある社紋



M153の車両側面にある社紋

精密な整備をするための手作り工具



手作りしていた理由

車両整備では、多種多様な工具が必要でした。しかし工具の揃ったお店が少ない上に、特殊な工具が必要だったため、作業員自ら鍛冶場で必要な道具を一からつくっていたようです。

手作りしていた時期

1970年代後半から車両整備に携わっていたOBによると、M15形の車両が入線した1955年よりも前だろうとのことでした。そのため自身が手作り工具を使うことはあっても、自作した経験はないそうです。

展示品のスパナ・レンチの用途

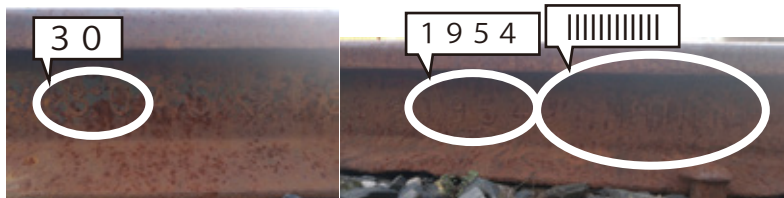
電車のモーターの部品を付け外しするために使ったとのこと。とてもサイズが大きいため、それだけ大きな部品を扱っていたことが分かります。

列車を安全運行させるための設備

レール

レールの刻印について

鉄道のレールには、製造された時の情報が記されています。下の写真の左側にはレールの重さを示す数値が、そして右側には製造年と「J」の印が12本記されており、この本数は製造月を示しています。これを読み解くと、「1954年12月に造られた30キロレール」であることが分かります。なお、展示物のレールに刻印は見られませんが、車庫の外にあるレールから確認することができます。



KD12形がある車庫の外に伸びているレール



役目を終えたレールの活用方法について

長期間使われ、車両のレールとしての役割を終えたものは、廃棄されるのではなく、別の用途で使用されるものがあります。例えば駅舎の支柱として、古いレールが使われています。若柳駅のホームやミュージアムの車庫内で見られるため、機会があれば探してみてください。



どうつ 導通ベル



車内における電気回路の断線トラブルを確認するためのベルで、電車時代(1950年頃～1994年)に使われました。上部のつまみに線をつなぎ、左側のハンドルを回します。もし断線していなければ、ベルが鳴る仕組みです。

次回予告

車両整備・工具作成のための鍛冶場

【くりでんミュージアムへの問い合わせ】

TEL:0228-24-7961

FAX:0228-24-7962

メールアドレス:info@kuridenpark.com